

令和2年度第6回人権教育学級

日時：11月12日(木) 10:00～11:30

場所：別府市役所 5F 大会議室

テーマ：子どもと人権

「子どもの発想と心を育てる魔法の声かけ」

講師：あすらん(学童保育・フリースクール・高等学院)

代表 片原 由貴子 さん

講演概要

1 プロフィール

- ・1976年生まれ
- ・大分で生まれ東京育ちの転勤族
- ・大分でいじめに？
小学生の時に大分に帰ってきた。シーソーで遊んでいる時に「かてて」と言われたが、言葉の意味がよくわからずに黙っていた。無視と勘違いされ・・・
- ・アメリカにいった
中2の時に、転機が訪れる。アメリカに留学。



<講師の片原 由貴子 さん>

そして、そこで「自分を表現しないといけない。いやならいやと言わなくてはいけない。自分から発信しないといけない。」ということを読んで日本に戻ってきた。

- ・夢は一つじゃないよ
大学生になってからはアナウンサーになりたいと思い、いろいろ頑張ったが、3日徹夜をして倒れた時に、「自分じゃなくてもかわりはたくさんいる。」と悟った。ちょうどその頃、恩師から「あなたは、何で夢が一つなの？夢はたくさん持っていていい。その中でいろいろとやってみていい。」と言われ、第2の転機が訪れる。
- ・通信制高校講師
教員免許を取るために大学で学びなおし、塾講師を経て通信制高校の講師になった。不登校の子どもたちと交わる教育に魅力を感じ講師として頑張った。
- ・一児の男児の母親
子どもが幼稚園から小学校に上がる間も通信制高校で働いていたけれど、わが子といっしょにいられる時間は限られていた。いっしょにいられないのがすごく嫌で仕事をやめて学童保育を始めることとした。
- ・「あすらん」代表

2 「あすらん」スタート！！ 最強の親バカと自分の居場所

初めは、不登校の高校生や中学生のための仕事にしたかったが、運営面でハードルが高く断念。学童保育ならばわが子といっしょにいられるし仕事もできる。そういう発想に至り学童保育を始めた。

3 問題点満載！どうする？

銀行や機関	場所	ターゲット
預かり時間	教育	教養
学習	礼儀	リーダー

学童保育を始める時に銀行や施設・機関などに出かけていろいろ話をしたが、その度に「無理です。やめた方がいい。世の中甘く見ています。儲かりませんよ。」など、数多くの反対にあった。そう言われると返って燃える。「やってやるわー」・・・そこで手助け、導いてくれる方と出会う。とはいえ、最初の一年間は3～4人しか子どもが来なかった。

いよいよ閉店・廃業が視野に入った時に、「どうせ、廃業するならうちの子どものために何かしよう。」と思い、職場体験をはじめいろいろなことを始めた。

すると、子どもたちがどんどん成長していき、翌年から入って来る子どもが増えていった。8年目の今は、50名となっている。

4 子どもの成長に驚く毎日

<まさかの署名活動>

ある日、子どもたちが話しかけてきた。「どうして、お泊りに行かないの？」
「そうだね。いつか、お泊りしたいね。」と話すと、後日「全員の名前と保護者名を書いたキャンプに行きたい人リスト」を持って、子どもたちがやってきた。だれも教えてもないのに子どもたちが自主的に動いて署名活動を行ったのだ。スタッフ一同大慌てで、キャンプの準備にとりかかった。

<コロナ自粛生活だからできた会社>

コロナだから、「閉じ込めなくてはいけない。職場体験に行けない。体験学習できない。」というのは、大人の考え。子どもたちは、違う。コロナだからできることを考える。

まず、6年生8人が各国の首脳に扮して、各国首脳会議を開催。そして、3つの会社を立ち上げた。

- ・ビューティーショップ「あすらん」・・・みんなのおしゃれを考えて実行する会社
- ・管理会社・・・整理整頓や手すりの消毒、忘れ物、そして、お金までいろいろな管理をする会社

・株式会社「なかま」・「あすらん」のイベントを企画し実行する会社
※会社の給料は、子どもたちの発想でお菓子とした。お菓子をそれぞれの会社に渡すと、子どもたちは工夫してみんなにお菓子（給料）が行き渡るように工夫していて感動した。

これらの会社を子どもたちが自主的につくり、企画・運営できたのは、いろいろな職場体験を通していろいろな大人に出会い、その大人の背中を見て学んだからだろうと思う。改めて、子どもの力はすごいと感じた。



<講師の話を熱心に聞く受講者>

5 高等学院始めました

不登校の子どもがいた。高校まで行ったけどそのあとやめてしまった子どももいた。そんな子どもたちの「勉強したい」という願いに応えるために、通信制の高校を立ち上げた。山口県のA学園高等学校に接続することで高校卒業の資格がとれる仕組みになっている。これまでに8名が卒業。7名が進学、1名が就職。

その中にBさんという中学生がいた。会った当初は、首をふる、うなずくなどのジェスチャーのみで声を出すことはなかった。ある日、その子が、「魚を食べたことがない。」と言った。その言葉を聞いて、釣り堀に魚釣りに行くことにした。「魚ってこうやって食べるんだね。こんなにおいしいとは思わなかった。」と言った。その子が中学3年生になった時に、マスクをはずし笑顔で学童の子どものお世話をするようになった。そのうちに「自分は子どもが好き」ということが分かったという。そして、「先生になる。」と言ってきた。「なぜ学校が大嫌いだったのに、大人になってまで学校に行きたいの？」と聞くと「自分は、学校生活を送ったことがない。だから仕事として学校生活を送りたい。」と言った。

大学卒業後ついに、自分の夢を叶えることとなった。その子にとっての転機は、釣り堀だった。「子どもってどこからでも変われるんだ。」と思い、感動した。

6 自己肯定感と日本の現状！悲しかった言葉

(内閣府が示している自己肯定感の調査結果を提示)

日本は、とても自己肯定感が低い。「自分自身に満足している」の項目は、45.8%で日本は他国よりもずっと低い。また、「自分には長所がある」は、68.9%でこれも他国に比べて低い。また、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」も低く、「つまらない、やる気が出ないと感じたこと」や「ゆううつだと感じた」ことについては、他国よりも高い。

保護者の皆さんは、自分のいいところ、すごいところを何個あげることができまらうか。大人ができれば、子どももできる。大人ができなければ子どももできないのだ。よく、親ごさんが言う。「うちの子は、そういう子どもじゃないので・・・」と。子どもの可能性や持っている力を親が決めてしまっているところがある。

7 フリースクール始めました♪

□小学生、中学生対象

□心の解放

□居場所

□笑顔

□愛する

□受け入れる

□導き出す

・フリースクールには現在14名の子どもたちが通っている。学校に戻っていく子どももいる。心の解放を主としている。小さい時からいろいろな悩みを抱えてきている子どもたちである。自己肯定感は、まず、持っていないので、スタッフは、「いいね。」という言葉から入る。子どもたちが何を言っても「そんなん、ムリムリ。」とは言わない。「いいね。それ、いいんじゃない。」そこからスタートする。

子どもたちもさることながら、スタッフの中に遅刻をしってくる職員がいた。以前は、「何で遅刻するの？」と怒っていたが、ある日、気がついて、「いいねえ。遅刻をしてまで、来てくれたん？責任感強いねえ。すごいねえ。」と声をかけた。そういう声かけをしていると、そのスタッフは遅刻をしなくなった。遅刻するのは、相手の問題だと思っていたが、実は、自分（私）の問題だと気づいた。そして、子どもたちが悩んでいるのだったら、「まずは、受け入れてあげよう。」と思うようになった。

- ・冷蔵庫に筆箱が入っていた事件・・・熱くなった筆箱を冷蔵庫で冷やそうとしたCさん。子どもには子どもなりの理由がある。
- ・大人が楽しくないと子どもも楽しくない。
- ・膝や背中にまつわりついてくる子どもたち
- ・「自分は、受け入れられている」と子どもが思えることが大切
- ・言葉は重い・・・発する言葉に意味がある。
- ・「言葉の影響はすごい」ことの証明として2つの瓶を提示する。

Aの瓶には、「ありがとう、ありがとう」と言いながらごはんを詰めた。

Bの瓶には、「ばかやろう、ばかやろう」と言いながらごはんを詰めた。

ごはんは、平成16年8月7日に同じ釜で炊いたもの

Aの瓶・・・つぶが残っている。



これだけ違うんです。ごはんは、いっしょですよ。言葉ってすごいですね。物でも証明できるのです。

Bの瓶・・・どろどろになっている。

8 子どもの発想と言葉☆おもしろ事件簿

- ・痛いよ・痛いよ、更年期→口内炎
- ・見てみてさぎがおる。⇒オレオレさぎや
- ・ここがいたいんやわ、ふくらあげ→ふくらはぎ
- ・運動会シーズン、オイル交換→エール交換
- ・何うどんが好き？→さぬきうどん

・・・など、子どもの発想と言葉はおもしろい。

9 子どもの視点と大人の視点

- ・かまきりとおおろぎの話・・・子どもと親（大人）の受け取り方のちがひ

10 これからの課題と今後の活動

<これからの課題>

- ・学童保育・フリースクール・高等学院ともに補助がないので経営は大変。運営面を工夫していく。
- ・学校との連携
- ・保護者との連携・・・子どもたちに携わる大人たち自身に肯定感があるか、笑っているかをまず考えていきたい。そして、子どもたちにどうしたら肯定感をつけることができるか考えていきたい。

<今後の活動>

- ・子どもたちの困りと保護者の困りに寄り添い、心のケアをしていきたい。
- ・通販サイトの立ち上げ・・・子どもたちは物づくりがうまいので、みんなで物づくりをして、通販サイトで販売したい。そして、収益金を活動費に充てたい。

<最後に>

- ・子どもたちや周りの人に、「いいねえ。」と声をかけてほしい。そうすることで、相手の自己肯定感が高まってくるので、自分にもいい、相手にもいい、最高の状態に仕上がってくる。

そして、自分が、汚い言葉を使った時には、瓶詰のお米のことを思い出してほしい。汚い言葉を使った時は、「これは、自分の問題であって、自分で解決すればいいんだ。」と思ってほしい。ここがポイント

最後に子どもたちの活動の様子が分かるVTRが流れた。1年生から6年生まで学童に在籍していた6年生の「あすらん」独自で行った卒業式の時に流し

たVTR。「いいね、いいね」と声をかけてきた子どもたちのいきいきとした活動の様子が映し出された感動のVTRだった。

今日は、「いいね」という言葉をお持ち帰りいただければ幸いです。



<受講者の質問で学習が深まりました>

<質疑・応答> ※応答のみの掲載です。

- ・大分に帰った時のいじめのきっかけは、「かてて」という言葉の意味が分からず黙ってしまったことだが、結局は、コミュニケーション不足だったと思う。
- ・職場体験・・・子どもたちに体験させるためには、何回か自分で足を運び、実際に見て、職場の人と話をしてアポをとる。

- ・心の不安や心の問題を抱えている子どもとコミュニケーションをとる時には、まず、その子と仲良くなって大人を信じてもらうことが大切。そうすることで子どもが本音を吐き出せるようになる。
- ・保護者の支援は難しいが、まず、じっくりと話を聞く。そうすることで、保護者からの信頼を得る。内容や程度によっては、関係機関や施設などにつないでいく。
- ・アメリカに行く直接のきっかけは、学校から持って帰ったチラシ。「こういうのがあるんだけど・・・」と言って、中学校の先生がチラシを配ってくれた。
- ・アメリカで学んだことはいろいろあるが、まず、アメリカに着いたときにホストファミリーが行ってくれたウェルカムパーティでの出来事から「自分の意思を表すことが大切」ということを学んだ。視野が広がり、見方も変わった。例えば、ペットボトルのお茶一つとっても、容量は算数・数学、生産地は社会科、カテキンは家庭科・英語というように多面的に学習できるということ。

※コロナ感染症の関係でグループ討議や全体交流は中止です。